

## 論文の内容の要旨

論文題目 「元号」の歴史社会学 戦後日本における歴史意識の変容  
氏名 鈴木洋仁

本論文は、「元号」が、どのように近代日本の歴史意識に作用するようになったのか、という問いを掲げた上で、そこに「戦後」が媒介要素として作用していたのではないかと、との仮説を立て、「元号」という日常的なカテゴリーを問うものである。

本論文の問いをまた別の形で言い換えれば、それは、時代をあらわす記号である「元号」が、なぜ、いかにして、「近代日本」の「歴史意識」に作用するのか、ということである。その作用は、いかなるものであるのかを、「戦後」という時代区分との関係性において明らかにする。

裏を返せば、この問いは、「元号」とは何か、という問いであるとともに、その「元号」による時代区分が、「戦後」において形成されてきたのではないかと、という問いとも同義である。

「戦前」における「元号」は、「戦後」とは異なり、時代区分のインデックスとして、現在ほどは作用していなかったのではないかと。それほどまでに、「戦後」の拘束力は強いのではないかと。こうした問いを本論文は解き明かす。

具体的な議論は、下記の通りである。

第1章では、本論文全体を通して議論する、「元号」とともに立ち上がる時代区分・時代精神についての理念型を提示する。「元号」とともに時代を区分できるという集合的意識の生成、すなわち、「元号」の区切り＝時代の区切りという見え方は、「明治」以後、天皇と元号を1対1で対応させる一世一元以降よりも、戦後の「昭和」に構成された。より正確には、元号を時代の区切りとしたい、という期待が構成された。本論文は、「戦後」と対比する「昭和」、「戦後」の相似形としての「大正」、「戦後」の起源としての「明治」という3つの類型を提示し、「明治」「大正」「昭和」の3つの「元号」が「戦後」との対応関係において浮上してくる場面を検証することによって、「元号」とともに立ち上がる歴史意識の3類型を検証する。図式的に記せば、「昭和」vs「戦後」、「大正」∞「戦後」、「明治」∋「戦後」となる。また、本論文における対象選択の原理についても、この類型との関係において明らかにする。

第2章では、本論文が何を先行研究としてふまえているのかについて議論する。「解体論」や「つくられた伝統論」という不毛な二項対立に収まる先行研究を批判的に検証し、本論文の学術的貢献を明確にする。本論文は、社会科学、なかでも、社会学として「元号」を扱う。その積極的な意義について論じる。抽象的な時間論を扱う哲学でもなければ、時系列の変遷を記述する歴史学でもない。学知そのものの存在意義を問う実践としての社会学として、本論文を位置づける。

具体的には、本論文のプロトタイプと言える、修士論文「元号の歴史社会学」の批判的再検討を行う。とりわけ、当該論文における百科全書的な対象選択とその理由について再検証する。

そして、先行研究として歴史学における「時代区分論」を取り上げ、時代区分という便宜的な区分けと「元号」との差異を明らかにする。

第3章は、〈歴史社会学〉という枠組みを用いて、「元号」を対象とする問題意識の基本構成を述べる。主として、佐藤健二による歴史社会学の規準、(1)歴史遡及が現在性から出発するこ

とへの自覚、(2)比較を通じた脱領域性、(3)研究主体の立場性に関する再帰的な実践に沿って、本研究の立場を明らかにする。具体的には、(1)問題設定が、「平成」という元号による時代区分の困難という現在性であり、(2)「明治」以来の時系列という比較枠組みを設定しており、(3)こうした歴史社会学の記述それ自体への分析視角を有している点を論じる。同時に、第4章で扱う対象の選定基準についても述べる。

第4章から第6章では、「昭和史論争」「大正デモクラシー」「明治百年」を論じる。具体的には、「昭和史論争」と「もはや「戦後」ではない」の同時代性、「大正デモクラシー」と「戦後民主主義」の相似性、そして、「明治百年」と「戦後20年」対比性といった、「元号」と「戦後」の対称性をめぐる議論が生じた、その仕組みと理由を考察している。

第4章では、「昭和史論争」と「もはや「戦後」ではない」という標語の同時代性に着目する。3人の若手歴史学者が書いた『昭和史』(岩波新書)は、当時のベストセラーとなり、そして、文学者たちとの間で論争に発展した。同書は、「昭和史」=「戦前史」として切り捨てた上で、「戦後」という新しい地図を描き出そうとしていた。その構図を描くために、自分たちの議論の「科学性」を主張していた。そして、同時期に、「もはや「戦後」ではない」という経済白書の標語が流行語となるほどに人々の支持を得た。この同時代性について、その形成過程と、理由を論じることによって、「戦後」と「昭和」の対比性、すなわち、「戦後」vs「昭和」という類型の形成過程を分析する。

続く第5章で検討するのは、「大正デモクラシー」に「戦後民主主義」の相似型を見る機制である。「大正」の「戦後」という通念は、「戦後民主主義」のプロトタイプを「大正デモクラシー」に見る傾向である。しかし、この術語を広めた歴史学者・信夫清三郎は、そこにネガティブな意味を込めている。にもかかわらず、「戦後」の「大正」と捉えられる理由は、なぜなのか。これを論じる。

第6章において検証するのは、「明治百年」において、「明治」⇔「戦後」という類型が、「戦後20年」との対称性において、なぜ、そして、どのように形づくられたのか、という点である。「明治百年」を国家的なイベントとして進めようとした政治の側と、これに対して、「戦後20年」を打ち出した評論家や歴史学者たちがいる。一見すると、「明治百年」か「戦後20年」か、という問いは、所与のものに見える。

しかしながら、「明治百年」を提唱した桑原武夫とそれを引き継いだ竹内好の構想は、二者択一ではない。「明治」に対して、桑原は複数性を、竹内は二重性を見ている。この意義を、第6章において詳述している。

最後の第7章では、本論文の最終目的である、「近代日本」全体の歴史意識の解明に向けた青写真を描く。具体的には、「近代」「日本」「歴史意識」の3つのパートに分けて、本論文のこれまでの論述を振り返りながら、本論文の価値と、今後の課題についてまとめている。